大阪府教育委員会　令和元年度完了報告書

１．調査研究概要

今年度は、小学校６校、中学校１校で学習指導要領に定められたカリキュラム・マネジメントの内容を踏まえながら児童・生徒や学校、地域の実態に応じた取組みを進めた。とりわけ、各実践校がカリキュラム・マネジメントへの理解を深めつつ、それぞれの研究テーマと自校の実態に沿った研究を進め、PDCAサイクルを構築し、成果と課題を明らかにし、その調査研究結果を次年度への取組みとつなげることを意識した。概要は以下のとおりである。

（１）各実践校における研究テーマに沿った実践と検証
（２）各実践校の研究内容を共有、協議・検討するためのカリキュラム・マネジメント検討会議の開催
（３）カリキュラム・マネジメント実践研修の実施（大阪府教育センター）

成果については、各実践校がカリキュラム・マネジメント検討会議やカリキュラム・マネジメント実践研修に参加し、理論について理解を深め、他校の実践事例を知ることで、研究を推進することにつなげることができた。また、研究の推進とともに、各実践校におけるPDCAサイクルが確立され、アンケート等の結果に基づく課題の分析や課題に対する解決方法の設定、実践内容が調査研究開始当初より、具体的になってきている。

令和元年度は、年間指導計画や校務分掌を、見直し再構成したり、実践校がテーマとする学びのつながりを確認することなどを通し、主に、各実践校の教育活動の質の向上を図ってきた。今後は、令和元年度の取組みを土台に、教育活動の質の向上を、根拠とともに検証し、実践校として、「発信」を意識した取組みを進める。

（実践地域における年間実施スケジュール）

月	取組内容
５月	実践校の選出（７校）（府）
６月	カリキュラム・マネジメント実践研修（府）
７月	アンケート等の実施・検証（実践校）
８月	アクティブ・ラーニング&カリキュラム・マネジメントサミット 2019 で発表
９月	令和元年度の取組み（前期）の検証とまとめ（実践校）
10 月	第１回カリキュラム・マネジメント検討会議（府）
11 月	
12 月	実践校訪問（文部科学省・府）、アンケート等の実施・検証（実践校）
１月	令和元年度の取組みの検証とまとめ（実践校）
２月	カリキュラム・マネジメント実践研修（府） 第２回カリキュラム・マネジメント検討会議（府）
３月	今年度の取組みのまとめ及び次年度計画立案

２．調査研究の内容

実践校【枚方市立第一中学校】

（１）　研究テーマ

☑　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

①自信をもって学べる子どもの育成

②「表現力（＝きいて考えたことを自分の言葉で説明できる力）」・「コミュニケーション力（＝多様な考え方を持つ人たちに対し、自分の意見を臆せずに言えて合意形成を図る力）」の育成

③主体的・対話的な学びの実現による学力向上

（２）　調査研究の内容

研究仮説

自己肯定感を高める教科の授業実践 - 「わからない」と言える教室づくりに取り組み、全教科領域において、教科等横断的に組織として取り組む教育課程を編成することで、上記①～③の資質・能力をもった生徒の育成ができるだろう。

（ｉ）自己肯定感を高める教科の授業実践　－「わからない」と言える教室をめざす

●全国学力・学習状況調査の活用

前年度の結果分析から１年間取り組んできたことをチェックし、関西外国語大学・坂本暢章教授の助言に基づき、今年度の結果と今後の取組みを保護者に公表した。

（全国学調質問紙調査「自分にはよいところがあると思う」肯定的回答）

Ｈ29　72.1%(本校)　70.7%（全国）【＋1.4pt】
Ｈ30　77.7%(本校)　78.8%（全国）【－1.1pt】
Ｒ01　62.6%(本校)　74.1%（全国）【－11.5pt】
→「学級集団づくりを教育の重点に据え、安心して自分の考えを話すことができ、教室で学習できる環境づくり」、「生徒が必死で考えたい、取り組みたいと思う課題や場面を設定し、『今までに学んだこととつながっている、わかる』と思える」授業づくり等、授業を通して自己肯定感を高める取組みを推進する。

●授業で提示する課題・問いの工夫

グループで納得解を出せる、他者の考えを聞きたくなる等の課題・問いの工夫に取り組んだ。→見通しを持って考えることや、試行錯誤をすることが、課題解決に向かう手だてであることに気づかせる。

（例）　理科　題材名　　エネルギー　電流の性質とその利用　　１章　電流の性質
『学校の電気回路を再現しよう』より

基本課題

直列回路・並列回路の違いを利用して回路のどこにスイッチを入れればよいのかを考え、正しく回路を作る。

発展課題

３路スイッチという未知のものに対して、その構造を予想し、回路の作成をめざす。

●総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメント

生徒が自信をもって学び自己肯定感を高めるには総合的な学習の時間における学びの深まりが必要であるとの考えから研究を始め、カリキュラムの編成を行い、生徒が発表し意見をもらう場面設定を組み入れ、生徒が自信をつけられるように進めてきた。また、発表した内容を受けて、より深く興味を持ったり、探究的な学びへとつなげる主体的な学びへと発展させることに取り組んでいる。

教科で学んだことが活用できないかを教員は意識し、生徒へと促しているところである。

●４人をベースにした学習形態

自分の考え・周りの考えを聴き合えるよう４人をベースにした学習を構成。1人ひとりの発表を大切にする習慣を身に付けさせ、周りの人の考えを聴く楽しさ、自分の考えを持つ大切さを意識させること、自分の考えを言って受け入れてもらえることで安心して学べることをめざした。

●表現の幅を広げるツールの活用

考えたことやアイデアをかき出すこと、自分の考えと周りの考えを比較しながら、自分の考えを新たに形成する思考ツールとしてホワイトボード（45㎝×60㎝）を導入し、活用した。また、40台のタブレットを使い、必要な情報を集めて問題解決を図る授業を取り入れるようにした。

上記のようなことを週１回の教科会で協議し、相互の参観を活用、指導方法の確認、課題や問いを蓄積するように努めてきた。

（ⅱ）その他の取組み

●学級集団づくり

特別活動において校外学習など班で判断・行動させる場面を設定するなど、生徒が自己肯

定感を高め、学習の基盤となる資質・能力の育成には学級集団の成長が欠かせないとの認識から学級集団づくりを進めた。

●先進校視察

集団づくりや教科横断等を意識したカリキュラム・マネジメントの取組みを行っている学校へ教員を派遣。→　視察交流会において共有

裾野市立西中学校（10／11）

能見市立辰口中学校（11／28）

京都市立桃山中学校（１／31）

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

成果

●生徒の姿の変化

学習規律を重視するあまりに講義調の授業でもきくことができる生徒を育成してきた本校にとり次のような生徒の変化は大きかった。

「自分の意見をもって伝える大切さを知った」「他人の考えをきくのが楽しい」「自分と同じ意見でも少し違うところがあるのが楽しい」「それぞれの教科でやっている学び方はつながっている」（生徒アンケートより）

外部講師による授業の機会では、本校の生徒のことを「問いに対して反応が早いのと、自分の言葉で話すことができていますね」の評価であった。

●教員の変化

職員室で前日に授業の準備に取り組む際に「この問いで生徒が一生懸命考えるだろうか」等アイデアを持ち寄って考えることが増えるようになった。新しいことにトライ＆エラーをすることで、よりよい教育をつくることができることを実感できている。

課題

●聴き合う関係を構築し、自己肯定感を高める

「自分にはよいところがあると思う」（学校アンケート11月）

１年生61.0%　２年生59.9%　３年生54.7%　学校全体58.6%

（※３年生の全国学調（４件法）の結果をうけて本校の重要課題として設定したが、より実情に迫る回答を得るため、学校アンケートにおいては５件法を用いた。）

「授業で、他の人の考えを聴くのは楽しい」（学校アンケート11月）

１年生57.0%　２年生59.9%　３年生57.4%　学校全体58.0%

「授業では人の話をしっかりきける雰囲気がある」（学校生活アンケート12月）

１年生58.9%　２年生61.0%　３年生58.9%　学校全体59.6%

結果より「自分のよさ」と「聴くこと」については相関があると考える。

生徒に「あなたは自分のよさをどうやって気づきましたか」とインタビューすると、友達に言われたことを答える生徒もおり、「よさを伝えてもらえる」「きいてもらえる」経験を積み重ねて自己肯定感を持たせていく必要がある。

●学びに向かう姿勢

「授業では間違えても大丈夫だという安心感がある」

56.3%（１学期）　→　51.5%（２学期）
「授業ではわからないことは『わからないから教えて』と言える雰囲気がある」
72.1%（１学期）　→　70.3%（２学期）※ただし１年生は　68.2%　→　70.8%とアップ
→一人ひとりの学びへの支援をどう充実させていくか
　４人での学習をベースにして「わからない」と言える教室づくりに取り組んだことで授業が楽しいと言っている生徒がいる反面、４人をベースにした学びに悩んでいる生徒もいる。
　１学期から２学期にかけて肯定的回答総数の割合が減少していた。４人をベースにした学習を必要な場面で設定、授業における課題、問いの質の向上等を教科会を通して見つめなおし、検討する。
●９年間を見通した小中の取組み
　場に応じた声量を図示した「声のものさし」や負の感情をコントロールする「アンガーマネジメント」等、コミュニケーション能力を育む取組みを校内で共有し、校区小中学校９年間で共通した教育環境を整えていく。
　また、キャリア教育について、校区小中学校で歩調をそろえて取り組む課題意識は各学校で共有しており、検討、研究を進めているところである。

今後の改善のための方策
●教科会の「見える化」
　教科会の意義は、授業で使う課題づくり、問いづくりのアイデアを出すのがメインであると認識し、生徒がホワイトボードで考えを出し合うように、教科会でもホワイトボードでアイデアを見えるようにする。単元指導計画表に課題と問いを蓄積していく。
　また、ホワイトボードを見える場所に１週間おいておくことで、授業づくり等の１週間の振り返りをする。他教科のホワイトボードをみることで、他の教科の授業も見やすくなるよう環境を整え、教科等横断を意識した授業づくりの材料とする。
●全ての教職員の意識の共有の徹底
　校務分掌の役割を精査し、教科間、学年間をこえて、自己肯定感を高める授業実践の取組みが学校全体で行われるように共有をはかる体制を構築する。各学年の「学習部」を通して、「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解し、日々の授業等について、教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組むことができるよう、リーダーの育成をはかる。
●学校全体でカリキュラム・マネジメントを進めるための方策
　学校のグランドデザインを作成することを通し、第一中校区でめざす子ども像を児童・生徒、教職員、保護者ひいては地域で共有し、より焦点化した取組みをすすめていく。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組み内容
７月	４日　外部講師による指導助言（関西外国語大学　坂本暢章　教授）
８月	28 日　外部講師による指導助言（関西外国語大学　坂本暢章　教授）
９月	11 日　外部講師による指導助言（関西外国語大学　坂本暢章　教授）
10 月	11 日　視察研修（静岡県裾野市立西中学校） 25 日　第１回カリキュラム・マネジメント検討会議（大阪府）

11 月	28 日　公開研究会参加（石川県能美市立辰口中学校）
12 月	９日　実地調査（文部科学省）　２３日　視察研修報告会
１月	14 日　公開授業および指導助言（横浜国立大学　髙木展郎　名誉教授） 23 日　外部講師による指導助言（関西外国語大学　坂本暢章　教授） 31 日　公開研究会参加（京都市立桃山中学校）
２月	４日　小・中学校「カリキュラム・マネジメント」実践研修（大阪府） 12 日　外部講師による指導助言（関西外国語大学　坂本暢章　教授） 18 日　第２回カリキュラム・マネジメント検討会議（大阪府）

実践校【和泉市立信太小学校】

（１）　研究テーマ

☑　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

研究主題　聴き合い！響き合い！育ち合い！　～豊かに学び合う教室をめざして～

研究仮説　学習過程の思考段階において、学ぶ値打ちのある課題を提示し、葛藤する場面を作ることで、子どもがつながり合い、主体的に学ぶだろう。

学習課題　筋道を立てて思考し、表現する力

（２）　調査研究の内容

相手の思いを受けとめる「聴く」力、自分の思いを語ることのできる「伝える」力を備えたコミュニケーション力を日々の授業の中で育成するために、ペアやグループ活動を通して相手の思いを受け入れ、自分の思いも伝える心を育むための「聴き合う」活動を日々の授業の中に取り入れ、学び合う授業を展開した。授業を展開するにあたって、全教員が①学ぶ価値のある課題設定、②子どもをみる力、③めざす子どもの姿の共有化、の３つのポイントを共通理解した上で、子どもたちが仲間との対話を重ねながら、「学び」の価値を見出すことができる、「子どもたちに学びをもたらす授業」をめざした。「子どもたちに学びをもたらす授業」を実現するために、日々の授業を相互に参観するとともに、年間６回の大研（研究授業）と一人１回の小研（公開授業）を行い、外部講師の助言も得ながら、以下のようにPDCAサイクルで改善を図った。

○事前に指導案を授業者、学年、研修主任が参加し、検討した。その際、新学習指導要領を根拠に、単元を通してつけたい力をつけていくための系統性を立てた。また、単元を通して子どもにつけたい力を身に付けさせるために、毎時間の「つけたい力」を明確にし、既習事項とのつながりを意識しながら、教材研究、教材解釈を行った。（P）

○子どもたちが主体的に聴き合えるような課題を設定するとともに、どの場面で子どもが聴き合い、学び合う機会を作るか、また、課題を通して子どもに学ばせたいことを明確にすることを意識した。（P）

○全教員による事前研を実施。全教員で、単元の内容、子どもにつけたい力、子どもにつけ

たい力をつけるための手だてとともに、授業を視る視点を共有した。また、本時の課題を事前研において全教員で実際に取組むことにより、学ぶ価値のある課題設定の大切さを共有することができた。（D）

○ペアやグループで聴き合い、学び合う学習を実施する中で、自分から友だちにわからないことを尋ねることができ、わからないということに、教員も子どもも温かく寄り添うことができる授業をめざした。そのために、どのように学ぶのか、「学び方」や「対話の仕方」（訊ね方や反応の仕方）を具体的に教え、授業の中で使えるように子どもたちに指導した。対話のイメージを子どもと共有するために、ビデオで撮影したものを学級の児童全員で見て、良いところや気づいたことを交流した。交流することによって、声かけの仕方、適切な声の大きさ、自分から尋ねるための声掛けなど具体的に関わり方が理解できた。（D）

○思考しながら主体的に「聴く」ための手だてとして「聴き方の達人」を全教員で共有した。「聴いたあと、感想や意見が言える」「聴いたあと、話について質問する」など８つの項目を作り、聴くことを体系的に捉え、視覚化した。（D）

○思考するときや、思考したことを表現するときに、思考を伝えるツールとして、テープ図や数直線に表したり、具体物を操作しながら説明させたりするなど、表現力を育むための指導法を全教員で共有した。子どもからも自分の考えを他の子に示しやすくなったという声が出ている。（D）

○研究授業後、子どもの学びと育ちを語る会（討議会）を行い、めざす姿の共有化を図るとともに、つけたい力がついているか、子どもの姿を通して見取った。少人数のグループで意見を交流した後に、全体交流を行うことで、意見を出しやすくした。討議会を通して、研究主題の「～聴き合い！響き合い！育ちあい！～豊かに学び合う教室をめざして～」について、子どものどのような姿が「豊かに学んでいる」といえるのか、全教員のイメージが一人ひとり違っていることがわかった。そのため、どのような子どもの姿が良かったのかを『授業デザイン→子どもをみる→めざす子ども像の共有化』という一連の流れの中で、教員同士で共有するようにした。（C）

○全国学力・学習状況調査の分析をした。全国学力・学習状況調査が終了後、児童解答用紙をコピーしておき自校採点を行った。全教員で、採点した児童解答用紙を基に分析を行った。分析から見取った「筋道を立てて思考し、表現する力」という児童の課題を視覚化し、いつでも意識するようにした。（C）

○各学期末に社会性測定用尺度を実施し、児童集団の意識の変化を把握した。（C）

○学習指導部で、研究授業で明らかになった成果や課題、今後の方向性を話し合い、研修通信を通して、全教員で今後の方向性を共有し、取組みを進めた。（A）

○研修後の振り返りを紙に書いて可視化することで、各自の授業改善に生かした。（A）

○授業改善の視点を学校全体で、次の①～③のように揃えた。(A)

①図解化や具体物の操作で思考する。⇒表現する。

②ペアの確立。

③子どもの声を聴く。子どもの疑問から出発する。根気よく声かけ。

上記以外にも、

○教科横断的な視点でのカリキュラム作成に取り組んだ。学期ごとに、単元の配列、どの教

科の単元を組み合わせるのかを見直し、改善を図った。
○全教員が年に１回は、研究主題に沿った公開授業を実施し、同学年やペア学年による相互参観を行い、授業で見取った子どもの学びと指導案をもとに協議し、授業改善につなげるPDCAサイクルを個人で回せるようにした。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

成果

○社会性測定用尺度や児童アンケートの結果から、次のような成果を見取ることができた。
・社会性測定用尺度の「わたしは、授業に主体的に取り組んでいます」という項目の肯定的回答が４～６年１学期末76.3%→２学期末80.2%
・社会性測定用尺度の「相手の話を素直に聞くことができる」という項目の肯定的回答が、５年生１学期末84.4%→２学期末89.6%
・２学期末児童アンケートの「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う」という項目において、４年生の肯定的回答の割合が市全体の82.2%に比べて87%、５年生の肯定的回答の割合が市全体の84.5%に比べて86.8%と、それぞれ市の平均を上回った。

上記の結果から、ペア・グループでの対話を通した学び合いは浸透しつつあり、自ら課題に取り組もうとする主体性も一定の成果が出ている。
・社会性測定用尺度の「さそってあげることができる」という項目の肯定的回答が４～６年１学期末81.5%→２学期末86.4%と増加した。

このことからペアやグループで聴き合い、学び合う学習を実施した結果、子ども同士のつながりが増えているといえる。

課題

・児童アンケートの「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う」という項目の肯定的回答が１学期末67.3%→２学期末62.3%へ減少した。

このことから、子ども同士のつながりは増えてきても、相手にわかりやすく自分の考えを表現することにまだ課題があることがわかった。そのため、１往復の対話で終わるのではなく、１往復の対話をきっかけに、じゃあどう思う？など対話を深めることができるように取組む。

教科横断的な取組み

・２年生では、国語の学習で読み味わった物語文「スイミー」の世界を、音楽（オペレッタ）で表現する。音楽にのせて表現することで、悲しさ・寂しさから元気になっていくスイミーの気持ちに共感しながら物語のイメージを深めることができた。
・４年生では、国語「だれもが関わりあえるように」に関連し、総合的な学習のテーマとして福祉学習に取り組んだ。車いす・アイマスクなどの体験や聴覚障がいの方のお話を聞く機会を通して学んだことをまとめ、発表した。今まで点字に触れたことがなかった子どもたちが、国語の教材を通して、点字について知り、総合的な学習で実際に点字について触

れたことで、点字とはこういうものだとさらに理解を深めることができた。また、点字に実際に触れたことにより、国語でも、子どもたちから、図書館でさらに調べたいという声が出て、学習を深めることができた。

・「聴き方の達人」を全教員で共有したことで、今まで聴くときの態度の指導だけに終わってしまっていた聴き方の指導が、学校全体で共通して、聴くときの質を意識して指導することができた。

今後に向けて

・上記の課題を踏まえて、「ペア・グループ・クラス・学年の子どもたちを、つなげるためのアプローチを重視する」ことが全教員で共有できた。そのために、教員が子どもの声を聴き、対話のモデルとなる。

・聴くことができる子どもを育てるために「ゆっくり話す」など、教員の子どもへの関わり方を変化させ、聴きたいと思える課題づくりの継続と、子どもが聴いてよかったと思える経験を丁寧に積み重ねることにより、教室の中に、お互いに聴くことができる雰囲気、周りの子に自分から関わっていく子ども、対話が生まれる場づくりをめざす。

・「思考力・表現力」を育むための単元計画とカリキュラムを作成する。また、「思考力・表現力」がついたかどうか評価するための評価規準・判断基準を作成し、指導案に明記する。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
７月	１学期の評価と反省 児童アンケート めざす児童像の修正 カリキュラムの修正
８月	夏期校内研修 ２学期の計画 学力学習状況調査の分析
９月	
10 月	研究授業（佐藤雅彰先生来校） 第１回カリキュラム・マネジメント検討会議
11 月	研究授業（小畑公志郎先生来校） 公開授業
12 月	２学期の評価と反省 ３学期の計画 児童アンケート カリキュラムの修正
１月	研究授業 学校評価の実施

２月	研究授業（佐藤雅彰先生来校） 研修の評価と反省 研修主題の見直し チェックテスト実施 学校評価の実施 カリキュラム・マネジメント実践研修 第２回カリキュラム・マネジメント検討会議

本計画とは別に毎月研修部会を開く。

実践校【摂津市立摂津小学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

主体的に学び、高め合う子どもの育成

～子ども理解を基盤に、つながりに気づく学びをめざして～

（２）　調査研究の内容

① つながりに気づき、つながりを生かす学習指導（カリキュラム編成と授業づくり）
② 学習のゴールを明確にした学習指導（授業力の向上）
③ 主体的に学び、高め合う教職員集団（70 人力）

① つながりに気づき、つながりを生かす学習指導（カリキュラム編成と授業づくり）

1. カリキュラム・マネジメントの理論と実践方法の研修
   - 校外研修への参加…　先進校視察研修（大分県中津市）
     カリキュラム・マネジメント実践研修
     カリキュラム・マネジメント指導者養成研修（NITS）
     アクティブラーニング&カリキュラム・マネジメント全国大会
   - 校内研修…　校外研修の還元（本校の研究テーマや実態に合わせて内容を精選）
     外部講師による研修
     → 実践の評価(C)、重点課題の設定(A)(P)

2. カリキュラム・マネジメントを支えるための環境整備（教務部のカリマネ）
   - カリキュラム表の改訂
   - 年間指導計画、指導時数の見直し
   - 朝のモジュール授業の実施

3. めざす子ども像の設定
   - 新学習指導要領の研修を生かし、本校の「強み」「課題」を「育成すべき資質・能力の三つの柱」に沿って考え、「めざす子ども像」を設定。

4. 他教科等とのつながりを生かしたカリキュラムの見直し（学期ごと）
5. 学習指導案の見直し
・「つながり」を生かした授業デザインを学習指導案に明記。
6.「めざす子ども像」に迫る手だて
・ まずは教師自身が、既習事項や他教科とのつながり、学習経験や生活経験を把握する。
・ 児童が次の学習で生かす姿をめざして、学習内容を身に付けさせる。
・ 見通す（出合う）場を改善し、児童が「つながり」を意識できるようにする。
・ 学習計画や学習で活用できるツール、児童の作品や振り返りを掲示し、つながりを「見える化」する。
7. 研究授業
・ 第1学年国語「よく見て書こう」…生活科、音楽科、学校行事（スマイルコンサート）との関連
・ 第3学年国語「食べ物のひみつを教えます」…社会科、総合的な学習の時間との関連
・ 第6学年国語「未来がよりよくあるために」…平和学習を柱とした総合的な取組み
8. 人・モノの活用
・ 地域の農業協同組合、外部講師、摂津小サポーターズ（PTA）の活用。
⇒ 今年度の取組みを一覧表にまとめ、活用できるようにする。
9. 全国学力・学習状況調査結果をふまえ、今後の重点的な取組みを保護者と共有
・ 学校と家庭の役割を明確にし、学校通信で発信。
・ 中学校区の3校で連携し、「家庭学習ウィーク」を実施。

② 学習のゴールを明確にした学習指導（授業力の向上）

1. ゴールイメージを明らかにした授業づくり～どのクラスでも 80 点の授業を～
・ 教員が重点目標を設定し、ワークシートを活用しながら授業改善に取り組む。
（個人⇒学年団⇒委員会）
2. 評価規準を具体化し、児童と共有
3.「見通す（出合う）」「振り返る」場の改善

③ 主体的に学び、高め合う教職員集団（70人力）

1. 研究推進委員会の運営、校内研修の内容や進め方の見直し
2. 研究の重点や成果の「見える化」
・ 職員室、玄関前に「見える化」ボードを設置。
・ 学習アンケートの実施と分析。
・ 校内研修通信の発行。

（３） 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

成果

1. 学習指導に対する教師の意識の変化
・「めざす子ども像」をふまえ、「児童が何ができるようになることをめざすのか」という考えで、教材研究をすることができた。
・ １つの教科や単元で指導するのではなく、他教科等の学習を生かして指導することが効果的であると共通理解できた。

・ 既習事項を想起させたり、単元のゴールを確認したりしようという意識が高まり、児童への声かけが変わった。

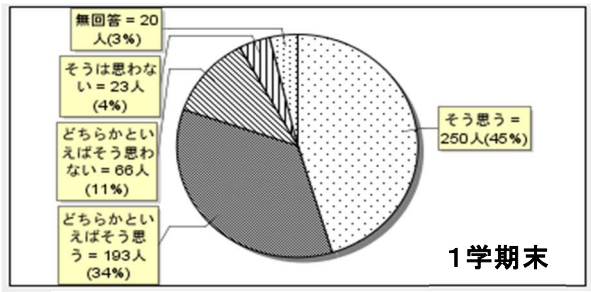
2. 他教科等とのつながりを意識したカリキュラム編成

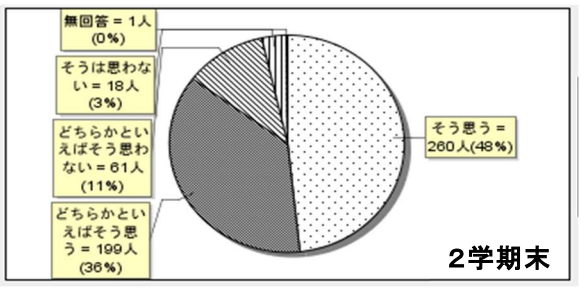
・ 創意工夫を凝らした取組みが活発に行われ、カリキュラム表にまとめることができた。
・ 既習事項や他教科等とのつながりを生かすことで、児童が「～したい」と高い意欲をもって取り組む姿勢が多く見られた。
・ 特に、学んだことや考えたことをアウトプットする場を設定する取組みが進んだ。
（文章や壁新聞などに書いて伝える。他学年や家族に説明する。）

3. 児童の「つながり」への意識の高まり

・「自分の書いたものをもう一度見たらいい。」などと、児童が既習事項を生かそうとする姿が見られた。
・「〇〇の授業と似ている」「つながっている」という声が児童の中からよく聞かれ、振り返りに書いている児童も多くいた。

【新しい学習をするときに、今までに勉強したことや、他の教科で勉強したことが役に立った。】





「そう思う」　↑３％増　　「どちらかといえばそう思う」　↑２％増

4. 学年団での研究の活性化

・ 創意工夫を凝らした取組みが活発に行われた。
・ 誰もが「つながり」を生かした学習計画を作成できるようになろうと、学年団で支え合い、成長し合おうとする姿が見られた。
・ 文部科学省実地調査では、「学年団の歯車がうまく回り、学校全体の歯車と連動している。」と、学年団の取組みを評価していただいた。

課題

・ 評価の観点の具体化
・ 子ども理解を基盤とした授業力の向上
・ 各学年の取組み内容のずれ

改善策

・ 児童の姿からカリキュラムや手だてを評価するための観点や方法をより明らかにし、教師も児童も成果や課題を実感しながら取組みを進められるようにする。
・ 各単元の評価規準を具体化し、ゴールイメージを明確に持った授業づくりを行う。
・ 評価規準を児童と共有することに取り組む。

・ 既習事項や他教科等のつながりに気づき、それを生かす学びを実現するための研究を進める。
・ 引き続き、学年間の交流や「見える化」の取組みを生かし、全ての学年が重点目標に迫る実践を進めていけるようにする。
・ 各学年のリーダーとなる「学力向上・研究推進委員会」のメンバーを支援し合う体制づくりを行う。

（４） 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
５月	カリキュラム・マネジメント理論研修、重点課題の設定
６月	先進校視察研修（大分県中津市）、カリキュラム・マネジメント実践研修
７月	カリキュラム・マネジメント指導者養成研修（NITSつくば中央センター） 校外研修の伝達研修、「めざす子ども像」の見直し
８月	評価規準の研修、カリキュラムの見直し、校外研修への参加（アクティブラーニング、カリキュラム・マネジメント全国大会）
９月	「80 点の授業づくり」「見える化」の取組みスタート
10 月	カリキュラム・マネジメント校内研修（講師：田村知子先生）、研究授業(第3学年) カリキュラム・マネジメント検討会議
11 月	研究授業（第1学年、第6学年）
12 月	文部科学省実地調査、カリキュラムの見直し
１月	各学年の実践のまとめ作成
２月	研究発表会（講師：田村知子先生）、カリキュラム・マネジメント検討会議 カリキュラム・マネジメント実践研修

実践校【枚方市立招提小学校】

（１） 研究テーマ

☐ a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑ b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐ c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

◆国語科を中心とした言語能力育成を図る授業についての研究
○各教科等横断の言語能力育成に向けた年間指導計画の作成及び「身につけたい力」と「質の高い言語活動」を意識した授業づくり
○府教育庁作成の教材「ことばのちから」を活用した招提チャレンジ(学期末テスト)の実施及び児童の意識
・学習状況調査に基づいた授業改善

（２） 調査研究の内容

【言語能力育成の取組み】
○国語科を中心とした各教科等横断の言語能力育成に向けた年間指導計画の作成
単元配列表をもとに、国語科と各教科等を関連させ、国語科で身につけた言語能力を他教科でも活用、国語科で不足している力を他教科等で補う指導計画を作成。

→　２学期末に計画の進捗状況と今後の指導内容を協議・検討するブロック学年会(低･中･高学年の２学年担任＋担任外＋支援学級担任のグループ）を実施した。
→　ブロック学年会の内容を表という形で｢見える化｣し、職員室に掲示。情報を共有することで、教職員の意識の向上を図った。

○国語科教育の外部講師を招聘した授業研究・研修の実施及び授業改善に向けた研究計画の作成・実施

国語科の授業づくりについて全教員で共通理解を図り、共通認識をもつため、講師に京都女子大学の水戸部修治教授を招聘し、授業研究・研修を実施。

→　「つけたい力」と「質の高い言語活動」を意識した授業研究を実施している。（学年会）
→　全教員による、研究仮説に基づいた言語能力育成を図る授業公開を実施している。
→　教員がお互いに参観できる授業を設定し、他の教員の授業を観る機会を多く設け、授業研究・教材研究を深めている。（ブロック学年会・学年会）
→　２学期末に実践の振り返りを資料にまとめ、全教職員に配付し、授業改善の参考にした。

○先進校視察

国語科教育の先進的な取組を行っている学校へ教員を派遣。（視察研修）
京都市立下京渉成小学校（６／26、１／24）
横浜市立大鳥小学校(11／１）
京都市立御所南小学校(11／８、１／17)授業公開と協議会に参加。
→　１／24に実施された京都市立下京渉成小学校の研究発表会には、20名の教員が参加し、皆で学ぶ姿勢を大切にした。

○大阪府教育庁作成教材「ことばのちから」を活用した招提チャレンジ(学期末テスト)の実施・結果分析・授業への活用

国語科等の授業で「ことばのちから」を活用し、言語能力の育成を図っている。学んだことの定着を図るため、毎学期末に行っている「招提チャレンジ(学期末テスト)」に「ことばのちから」から出題し、結果分析をして、今後の指導内容の見直しを図っている。結果が悪かったところについては、授業でテスト問題の解説時間を設定したり、長期休業中の宿題に出したりして復習に力を入れている。

○児童の言語能力に関する意識や、学習状況等を学期ごとに検証

児童へのアンケートを実施し、定量的評価を授業改善に役立てている。

聞く力（項目）	共通	友だちの方を見ながら、一生懸命話を聞いていますか。
	共通	友だちの話を終わりまで聞いていますか。
	１年	あいての　はなしを　しっかり　きいて　いますか。
	２年	大じなことを聞きおとさないようにしっかり聞いていますか。
	３年	どんなことを話しているのかを考えながら聞いていますか。
	４年	どんなことを話しているのかを考えながら聞き、質問したり感想を言ったりしていますか。
	５年	自分の考えと相手の考えを比べながら聞いていますか。
	６年	自分の考えと同じところやちがうところを考えながら聞いていますか。
話す力（	１年	はっきりと　した　こえで　はなして　いますか。
	２年	じゅんばんに気をつけて話していますか。
	３年	自分の考えを理由（わけ）といっしょに話していますか。

	４年	自分の考えを短く、相手に分かりやすく、話していますか。
	５年	事実や感想、意見を区別したり、話の構成に気をつけたりして話していますか。
	６年	資料を使って話をしていますか。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

（○：成果）（●：課題）（→：改善方策）

＊国語科を中心とした各教科等横断の言語能力育成に向けた年間指導計画作成と見直し

（２学期末のブロック学年会で協議内容）

・単元計画表に記載していないところで実施した「話す・聞く」力の育成の取組みについて

・単元計画表の活用方法についての意見

・日々の授業や「話す・聞く」力の育成に関する悩みについて

（協議で出された意見）

・国語科と社会科、国語科と総合的な学習の時間を関連させたことで、指導がスムーズとなったことを実感した。

・国語科と行事を関連することができ、児童の意欲がアップ、継続した。

・教科の特性に応じて、身につけやすい言語能力の特徴があることに気づいた。

等

○各教科等横断の言語能力育成に向けた年間計画を作成・見直しをしたことにより、言語能力育成の機会を意図的に増やすことができた。

●今年度は各学年による年間指導計画の作成であったが、次年度は１年から６年まで継続的・系統的に言語能力育成を積み重ねていけるような計画を立てる必要がある。

→　言語能力の育成に向けた年間指導計画を資質・能力ごとに整理し直し、１年から６年まで見通せる表を作成。その表に沿って、年間を通じた系統的な指導と定期的な検証を行う。

＊児童の言語能力に関する意識や、学習状況等を学期ごとに検証

（児童アンケートの結果から）

「授業で友だちと話し合ったり、考え合ったりする活動を行っていますか」

そう思う（強い肯定）　４年　６月　44%　→　11月　51%

５年　６月　62%　→　11月　75%

○〔４年　７ポイント増〕子ども主体の話し合い活動が増えたことが考えられる。

○〔５年　13ポイント増〕カリキュラム･マネジメントの観点から、国語科だけでなく、他教科等でも話し合い活動を多く取り入れた単元構成にしたことが要因と考えられる。

「授業で友だちと話し合う活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができていますか」

そう思う（強い肯定）　全体　６月　44.5%　→　11月　43.3%

●〔1.2ポイント減〕話し合う活動を設定してはいるものの、子ども自身が、考えが広がったり、深まったりしたと感じられていないことが課題である。

→　指導の工夫：話し合う意義・話し合う意図を、児童自身が交流前にしっかりと持ってから交流を始められるようにすることや、活動後に教師の言葉かけで子どもたちに広がりや深まりを自覚させることが必要であると考える。

→　振り返りのさらなる充実：児童が話し合う活動を通して身につけた力を実感できるように、身に付けた力を問うような観点を示して、振返りを行う。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
７月	先進校視察（京都市立下京渉成小学校） 児童アンケート実施・結果分析 招提チャレンジ（学期末テスト）の実施・結果分析 １学期の取組の総括及び２学期の取組の立案･確認 校内研修「今、国語科に求められている学びと授業づくり」 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授
８月	文部科学省「ＡＬ＆ＣＭサミット 2019」への参加 校内研修「新学習指導要領に伴う各教科の改善ポイント」 校内学習会「国語科授業づくり」 「言語活動の充実を図った授業づくり」 国語科研究授業（第３学年）・研究協議会（ﾏﾄﾘｯｸｽ法×短冊法） 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授
９月	
10 月	国語科研究授業（第６学年/市内公開） 研究協議会（ﾏﾄﾘｯｸｽ法×短冊法） 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 第１回カリキュラム・マネジメント検討会議（大阪府）
11 月	先進校視察（横浜市立大鳥小学校）
12 月	招提チャレンジ（学期末テスト）実施･結果分析 ２学期の取組の総括及び３学期の取組の立案･確認
１月	先進校視察（京都市立御所南小学校、京都市立下京渉成小学校）
２月	小・中学校「カリキュラム・マネジメント」実践研修（大阪府） 国語科研究授業（第２学年/市内公開） 研究協議会（ﾏﾄﾘｯｸｽ法×短冊法） 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 招提チャレンジ（学年末テスト）実施･結果分析 第２回カリキュラム・マネジメント検討会議（大阪府） 年間の総括・研究紀要作成 次年度の企画・立案・確認

【年間】
＊学年会・各ブロック学年会における授業研究・教材研究
＊府作成「ことばのちから」を活用した授業実践
＊招提言語力スタンダード（仮称）の研究･作成

授業公開・相互授業参観

実践校【和泉市立北池田小学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

「単元全体を通した言語活動」を通して、「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する資質・能力」を育成する。

（２）　調査研究の内容

【研究テーマ設定までの経緯】

これまで、本校では、学校目標「対話する子」の育成をめざし、校内研究テーマを「ペア・グループ交流」、「ホワイトボードの活用」、「めあてとふり返りの充実」、「発問にこだわった授業づくり」などとし、取組みを進めてきた。

そのため、定性的な評価（児童アンケート）では、「めあてとふり返り」、「ペア・グループ交流」に関する項目において、肯定的な評価が95％以上となり、日々の授業の中での定着も見られた。しかし、全国学力・学習状況調査を基にした定量的な評価においては、国語科、特に「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する力」に課題が見られた。交流はできるが、対話の質は高められていないという本校の現状とつながる結果となった。

これらの結果や新学習指導要領国語科の目標で示される「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成」、「言語活動を通して」という部分に着目し、本研究のテーマを【単元全体を通した言語活動を通して、「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する資質・能力」を育成する】と設定した。

設定した研究テーマに向かって、

〇単元を通してつけたい力を明確にすること

〇言語活動を通してつけたい力を育成すること

〇つけたい力をつけるための単元計画を作成すること

の３つの視点を基に授業改善を進めることとした。

上記の３つの視点を全教員で共有し、学校全体で授業改善を進めるために、

【①校内研究体制の充実（PDCAサイクルの確立）】

【②校内の人的資源の活用】

を取組みの柱とした。

【①校内研究体制の充実（PDCAサイクルの確立）】

子どもたちにめざす資質・能力を育成するために、校内研究体制の充実を図った。

特に、研究授業（全学年実施）の取組みを通して、指導案検討・事前検討会・研究授業（提案授業）・研究討議会・リフォーム授業というPDCAサイクルの中で、検討・検証していく体制を確立し、教員一人ひとりの授業力を高め、児童の言語能力を高めるという好循環をめざした。

具体的には、

Planとして、

〇指導案作成

３つの授業改善の視点を基に指導案を作成した。新学習指導要領を根拠として、マトリックスを活用し、１年間を俯瞰して適切なつけたい力を設定した。

授業改善の視点の定着を図るために、研究を学年任せにせず、指導案作成、先行実施クラスを使っての検証、練り上げ検討の全てに研究主任と学力向上担当が入り込み、学年と共に研究を進めた。

〇事前検討会

教員一人ひとりが事前に指導案を読み、事前検討会に臨んだ。検討会で、事前に質問を重ねることにより、単元全体のつながりや本時のねらいについての共通理解を深めることができ、明確な着目点・めあてをもって、研究授業を参観することができた。

Doとして、

〇研究授業

参観シートを活用することにより、研究授業の提案の柱・着目点を全教員で共有し、同じ視点で子どもの姿を見取ることができた。

Checkとして、

〇研究討議会

討議会が、全教員にとって自分事となるように、ゴールを「北池田小学校としてのよりよいリフォーム授業をつくること」とし、全教員で討議してリフォーム授業案を作成した。

Actionとして、

〇リフォーム授業の実施

リフォーム授業案を使って授業公開を行い、自由に参観できるようにした。リフォーム授業について、研究通信で成果と課題を発信し、全教員で共有した。

リフォームした単元指導案は、データとして蓄積、活用できるようにしている。

Check機能の充実のために、

〇研究授業単元末児童アンケート、評価問題の実施。（４年以上）

〇全教員で全国学力・学習状況調査や学期末力だめし問題（４年以上）の採点・分析を実施。

上記の取組みにより、教員が定性的・定量的な評価から、子どもたちの姿を通して、取組みを即座に振り返ることができるようにした。これにより、学期ごとに授業改善の視点を更新・共有し、新学期を迎えることができた。

以上のような流れで、PDCAサイクルを短い期間で回し続けられるように取り組んだ。

【②校内の人的資源の活用】

調査研究を進めるにあたって、校内研究時だけではなく、日々の授業においても、一人ひとりが授業改善の３つの視点に基づいた単元づくりができるようにすることが大切であると考えた。

そこで、学力向上担当者が研究主任と連携し、下記のような取組みを進めた。

具体的には、

〇年間計画に基づき、学力向上担当者が、すべての学年に入り込み、それぞれの学年教員と単元の共同研究と授業公開を行った。１学期は、学力向上担当者がT1として授業改善の視点を取り入れた授業を提案し、２学期からは、担任がT1、学力向上担当者がT2となる機会も取り入れながら、授業改善を進めた。

〇単元の共同研究を実践した単元（４年生以上）で、学力向上担当者が学年の教員と協力し

て単元末アンケート・評価問題を作成し、実施した。短い期間で、効果を定量的に見取り、検証する体験を積み、一人ひとりの子どもたちの姿を見取る力の向上をめざし取り組んだ。

○国語科を要とした教科横断的な視点を広げられるよう、単元を提案・実施し、公開した。現在、これらの取組みと絡めながら、カリキュラム・マネジメントの視点をもち、グランドデザインの見直しを図っている。

上記の取組みの結果、子どもたちに身に付けたい資質・能力を育てるための授業改善の視点を他の教員に伝えることができ、学校全体に短時間で取組みを広げることができた。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

○教員の意識の変化

授業改善に関する教員アンケートにおいて、「校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と共有し取組みにあたってきた」「有意義な研究授業及び効果的な討議会が行われた」という項目で「そう思う」「まあまあそう思う」を合わせた肯定的意見が１、２学期とも100％であった。また、その他の「自分の授業力の向上につながりましたか」「子どもの変容の姿を感じることができましたか」でも肯定的評価が２学期には100％になった。

特に、「そう思う」の項目については、

・「有意義な研究授業及び効果的な討議会が行われた」の項目で
　１学期67.7％⇒２学期93.1％
・「子どもの変容の姿を感じることができましたか」の項目で
　１学期25.8％⇒２学期51.7％
・「校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と共有し取り組みにあたってきた」の項目で、１学期54.8％⇒２学期69.0％
・「自分の授業力の向上につながりましたか」の項目で
　１学期58.1％⇒２学期75.9％

となり、すべての項目で割合が向上した。このように、教員が校内研究の意義を理解し、効果を実感することで、全ての学年、全ての学級で同じ取組みを実施することができ、子どもたちの資質・能力の向上につなげることができた。

○子どもたちの資質・能力の向上。

「校内研究体制の充実」の１つの柱だけではなく、「校内の人的資源の活用」という、２つの柱で取組みを進めた結果、校内に広く、速く授業改善の視点が浸透した。全教員が同じベクトルで取組みを進めた結果、４～６年生で実施した市の力だめし問題において、記述問題の正答率が１学期の45.7％⇒２学期48.7％へと向上した。

【課題】

○言語活動を通したさらなる授業改善の必要性

今年度の全国学力・学習状況調査において、国語の平均正答率が60％であった。「書くこ

と」・「読むこと」は全国平均に並び、全体として大阪府の平均正答率には並んだが、全国平均の63.8%にはまだ到達していない。特に「話すこと・聞くこと」の領域や「知識・技能」に課題が見られた。

児童につけたい力をつけるために、さらに言語活動の質を高め、授業改善を進める必要がある。

〇学校としての積み上げの蓄積・共有・活用について

今年度の実践事例は、データベースで保管しており、全ての教員が活用できるようにしているが、転勤してすぐの教員でもすぐに使うことができるように、紙媒体の方がいいのかなど、より使いやすく参考にしやすい形を検討していく。

【今後について】

〇質の高い言語活動の実践。

・「知識・技能」の定着を図る手だての提案・検証、魅力的な言語活動の提案・検証、子どもたちにとって課題解決の過程となる単元計画の提案・検証を行う。

・来年度からの新しい教科書（国語）の単元名・教材名・言葉の力の一覧表を作成し、教員が六年間、一年間を俯瞰して、適切なつけたい力・つけたい力をつけるための言語活動を意識した授業を実施しやすくする。

・新しい教科書に合わせて、４月の全体研でグランドデザインの国語科を見直し、更新する。

上記の取組みを通して、さらに質の高い言語活動をめざしていくとともに、国語科を要とした教科横断的な取組みへの見通しをもち、カリキュラム・マネジメントを進められるようにする。

〇誰でもできるを生み出すための体制づくり

・リフォーム指導案やワークシートなどのデータを、誰でも活用しやすい形を検討して整理・蓄積し、いつでも誰でも活用できるようにする。

〇国語科を通してつけた力をいかす、広げる。（児童も教員も）

・国語科を要とした教科横断的な取組みの充実を図る。そのために、年度末の全体研修でグランドデザインのふり返り、更新を行う。その際、次年度、自分たちだったらどのような教科横断的な取り組みを提案してみたいかを各学年で考え、交流する時間を設定する。

・次年度、各学年から教科横断的な取り組みを１題以上提案するようにする。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
７月	力だめしテスト・児童学習アンケート（４～６年）、教員アンケート、 全体研修：力だめしテスト採点・分析
８月	全体研修：言語活動について・２学期の単元プラン作成
９月	
10 月	全校公開授業（校内研究授業６年） 第１回カリキュラム・マネジメント検討会議
11 月	校内研究授業１年

12 月	校内研究授業２年、力だめしテスト・児童学習アンケート（４～６年）、 教員アンケート、全体研修：力だめしテスト採点・分析
１月	校内研究授業３年（講師：水戸部修治先生）
２月	校内研究授業５年 カリキュラム・マネジメント実践研修 第２回カリキュラム・マネジメント検討会議

実践校【熊取町立西小学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☑　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

「食に関する教育」

（２）　調査研究の内容

本校において食に関する教育については、「食に関する指導の全体計画」のもと、食における重要性や喜び、正しい知識や感謝、食を通じた人格形成など、地域の協力や外部講師、栄養職員などの協力を得ながら丁寧に学習を進めてきた。しかし、それぞれの取組みが独立したものになりがちな面もあった。そこで、これまでの校務分掌の保健食育安全部「食育」にカリキュラム・マネジメントの視点を加え、研究を進める部会を「食育（カリマネ）」とし、この研究を通じてそれぞれの取組みを深めながら、より教科横断的なものをめざして、食に関する教育を推進していく。

年間を通じて、これまで取り組んできた食に関する行事等は踏襲するものの、各学年が食に関する課題を明らかにし、その課題解決に向けて教科や行事をマネジメントしていった。行事ごとにPDCAサイクルが適切に回せているかを確認し、年度の終わりには、各学年が取組みを一覧にし、ふりかえりを実施する。来年度についてはそのふりかえりをもとにさらに充実した教科横断的な取組みを推進する。また、食に関する教育にとどまらず、人権や福祉の視点からもカリキュラムをマネジメントし教科横断的なつながりを意識した学習指導をめざし、教科指導の質を高めていく。

①アンケート調査（１回目実態把握）７月　　別添資料３

※「食に関する指導の全体計画」の各学年の指導目標より作成

（１）食べることが好き（全学年）

（２）食べることは大切だと思う（全学年）

（３）食べものについて知りたいと思う（全学年）

（４）好き嫌いせず、なんでも食べようと思う（全学年）

（５）植物を育てることが好き（全学年）

（６）食べものや作ってくれた人に感謝している（全学年）

（７）食べるときのマナーを守ることができる（全学年）

（８）地域（熊取町）の特産物を知っている（３年～６年）

（９）料理を作ることは楽しい（５・６年）

○２月の検証をめざして、各学年が食に関する課題を設定

学年	検 証 項 目	７月
１年	（３）食べものについて知りたいと思う	71.4
２年	（４）好き嫌いせず、なんでも食べようと思う	77.8
３年	（６）食べものや作ってくれた人に感謝している	86.1
４年	（７）食べるときのマナーを守ることができる	62.9
５年	（６）食べものや作ってくれた人に感謝している	69.6
６年	（７）食べるときのマナーを守ることができる	50.0

②熊取町教育講演会　８月

「カリキュラム・マネジメントについて」

大阪教育大学大学院　連合教職実践研究科　教授　田村知子氏

○カリキュラム・マネジメントとはどういったことか、実践事例をふまえて教職員で共有

③校内カリマネ研修　９月

○カリキュラム・マネジメントを進めていくために西小学校のよいところと課題を共有

（教職員のふりかえり）

・西小学校のよいところと課題を個人や学年で話し合うことはあるが、全体で共有する機会はなかったのでよかった。

・カリキュラム・マネジメントの目的を全教職員で確認し合うことができた。

・ソフト面の課題は日々の授業等で取組みを考えられるが、ハード面の課題については予算等が大きく関係するので早急な対応ができない。

④校内カリマネ研修　９月

大阪教育大学大学院　連合教職実践研究科　教授　田村知子氏　招聘

○各学年で食に関する課題を共有し、課題解決に向けての実践計画を立てる。

<u>各学年の取組みについて</u>

１年生…野菜の名前を覚えて野菜に親しませる。

２年生…自分たちの育てた野菜を工夫して調理し、野菜嫌いの子どもを減らす。

３年生…畑ではたらく方の工夫や苦労を知り、生産にかかわる人々へ感謝の気持ちを育てる。

４年生…食事のマナーアップ（食事マナーと学力が関係している。）

５年生…交流（保護者、地域、支援学級等）を進め、感謝の気持ちを深め、よりおいしく食事をとる。

６年生…食事のマナーを向上し、修学旅行での親交を深める。

（教職員のふりかえり）

・食育は家庭と切っても切れない関係にあり、生活環境や価値観については、家庭の協力と理解が不可欠であると感じる。

・作物を育てている人が学校のまわりには多いので、地域の人たちとの関わりを増やし、作物を育てる喜びや苦労など、生の声を聞かせていきたい。
・学年の取組みを知り、専科の授業にも生かしていきたいと思う。
・偏食の原因に発達障がいによる感覚過敏があるとき、どのように取り組んでいったらいいのか、アプローチの仕方を考えたり、取組みを工夫していきたい。
・バランスよく食べること、特に野菜を見たり、育てたりして、野菜を身近に感じられるように取り組んでいきたい。

⑤調理実習

5年　令和元年11月　７日、14日　ごはん、お味噌汁

（児童のふりかえり）

・毎朝、みそ汁が出てきます。お母さんに感謝しようと思いました。
・晩ご飯作りのお手伝いをしようと思います。
・にぼしからだしをとっているのにおどろいた。すごくいいにおいがしました。

アンケート結果　（%）

質 問 内 容	7月	2月
食べものや作ってくれた人に感謝している	69.6	81.6
料理を作ることは楽しい	67.4	53.1

※最も肯定的な回答の割合

（アンケート結果より）

調理実習を通して、「食べものや作ってくれた人に感謝している」という質問項目の最も肯定的な回答の割合は増加している。一方、「料理を作ることは楽しい」という質問項目の最も肯定的な回答の割合は減少した。肯定的な回答（楽しい、まあまあ楽しい）の割合は、増加していることを考慮すると、調理すること自体は楽しいが、準備や片づけを含めると楽しくないと感じる児童がいるように思われる。

6年　令和元年11月13日、18日　お弁当作り

（児童のふりかえり）

・自分でお弁当を作って初めてお母さんの大変さがわかった。きれいに食べようと思った。
・遠足の時などのお弁当を一食分だけ作るのは、材料がもったいないと感じた。

アンケート結果　（%）

質 問 内 容	7月	2月
食べものや作ってくれた人に感謝している	73.1	76.6
料理を作ることは楽しい	71.3	68.6

※最も肯定的な回答の割合

（アンケート結果より）

５年生と同様の傾向があり「食べものや作ってくれた人に感謝している」という質問項目の最も肯定的な回答の割合は増加している。一方、「料理を作ることは楽しい」という質問項目の最も肯定的な回答の割合は減少した。６年生については、すでに５年生から調理実習

を経験しているので、お弁当づくりというテーマについて課題があったのではないかと考えられる。外食市場が緩やかに減少しているのに対して、中食市場が増加しているという社会的背景を考慮すると、各家庭での内食の姿が減少していることが考えられる。そういった背景や子どものふりかえりからお弁当作りの大変さは感じられても、料理を作ることに楽しさを感じる子どもが減ってきたのではないか、という分析をしている。今後、社会的な背景を考慮した上でのテーマ設定が求められる。

⑥校内カリマネ研修　１月

武庫川女子大学教育学部教育学科　准教授　藤本勇二氏　招聘

○「地域とつながる食育」　食育に関する実践事例について

（教職員のふりかえり）

・食育は育てる、作る、食べるという切り口だけではないということに気づいた。
・食育を考える幅が広がった。
・食品ロス削減の取組みから食のマナーを向上させる取組みについて考えようと思う。
・土曜参観に向けての取組みを考えるヒントになった。

⑦アンケート調査（２回目実態把握）２月　別添資料４

○アンケートによる実践の検証及び見直し　（%）

学年	検 証 項 目	７月	２月
１年	（３）食べものについて知りたいと思う	71.4	84.2
２年	（４）好き嫌いせず、なんでも食べようと思う	77.8	89.5
３年	（６）食べものや作ってくれた人に感謝している	86.1	85.1
４年	（７）食べるときのマナーを守ることができる	62.9	64.0
５年	（６）食べものや作ってくれた人に感謝している	69.6	81.6
６年	（７）食べるときのマナーを守ることができる	50.0	49.4

※最も肯定的な回答の割合

（アンケート結果より）

６学年中４学年の検証項目について最も肯定的な回答の割合が向上している。成果の出なかった２学年についても１％以下の減少であり、人数にしてみると１人未満である。成果の出た学年については、課題と取組みがマッチした結果であると評価できる。成果の出なかった３年生については、社会見学を実施し、畑や店ではたらく人の苦労や工夫を感じられたものの、農耕の道具や産地などに強く意識が向いていたとふりかえっている。６年生についても、数値上は向上していないものの、修学旅行や普段の給食でのマナーの様子から日々の取組みや行事を経ることでマナーを守る意識が高まっているとふりかえっている。

⑧校内カリマネ研修（ふりかえり）２月　別添資料１

○作成したカリマネ表をふりかえり、PDCAサイクルを次年度につなげる。

○来年度は学年によって教育課程が変わるので、来年度のカリマネ表(案)を作成する。

（教職員のふりかえり）

・教育計画（実施済み）を「見える化」したことによって、これまでの取組みをふりかえりやすくなった。年度当初からの必要性を感じた。
・他の教科とのつながりを意識しやすくなった。来年度に生かせそう。
・授業時数をカリマネ表に追記すると、さらにわかりやすくなると思った。
・カリマネ表をきっかけに学年での話し合い、議論が活発になった。
・他学年の取組みを知って、系統性を考えることができた。全学年のカリマネ表の共有が必要と感じた。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

本調査研究事業を受け、これまで課題であった、それぞれの取組みが独立したものになりがちであった面が、ジグソーパズルのように教科横断的な視点で取組みをつなげて考えられるようになってきたと評価できる。これは、各学年が教育計画をカリマネ表に示し、「見える化」したことの成果であると考える。また、全学年のカリマネ表を縦のつながりで意識することによってブロックを組み立てるかのように学年を縦断した教科縦断的な視点で考えることができた、との声もある。そういった面では、特に教職経験の浅い教員にとっては、このカリマネ表は有効であると評価している。３月のふりかえりには、教科縦断的な視点を意識できるような研修会を進めていく。

また、本調査研究事業を受け、改めて本校の課題を教職員全体で共有することによって、究極の目標は学校教育目標を実現することにあるという教職員一人ひとりの意識が高まったように感じられる。これは、これまで各学年が実践してきた取組みを踏襲するものの、その取組みの意義や目的、さらには実施時期を意識することによって、内容を精査したり、学年の実態に沿った内容に変えたりすることができるようになったところから評価している。これも各教職員がカリキュラム・マネジメントを意識することができるようになった成果と考えられる。

それぞれの学年が教科横断的な視点をふまえ教科指導や行事等を進めていたものの、食育（カリマネ）部会によるふりかえりを進めていく中で、以下に示す課題と課題解決の方策が考えられた。

①委員会活動（給食委員会）の活動と各学年の取組みのつながり
→カリマネ表に委員会活動を示し、各学年の取組みを意識させる。また、子どもたちの委員会活動（給食委員会）の中からも食育を醸成できるような取組みを工夫していく。
②各学年の課題解決に向けた栄養職員による授業の実施時期
→単発になりがちであったが、カリマネ表に加えていくことで、来年度は適切な時期での実施が考えられる。今年度の栄養職員による食に関する授業は、どの学年でも好評であった。給食後に子どもたちが嬉しそうに完食した話や苦手な野菜を食べたという話が栄養職員にあった。実際に給食の残食量が減ってきた学年・学級が多く見られた。
③学年を縦断した取組みのつながり
→今年度末のふりかえり（３月）をふまえ、来年度当初にカリマネ表（案）を作成し、さらに全学年のカリマネ表を共有することで各学年の指導内容を縦断的に意識した取組みを推進する。来年度のカリマネ表（案）には、教職員から出てきた「授業時数を追加した方が

効果が上がるのでは」といった意見等を取り入れ、より効果的なカリマネ表を作成していく。

④校内研究テーマ、研究教科（理科）とのつながり

→研究主任と連携し、本校の研究テーマ「楽しく、共に学び合う学習をめざして－一人ひとりが伝え合う喜びを味わう－」を、つながりを意識したテーマに変更していく。そして、研究教科である理科の単元と食育とのつながり、もしくは他教科や他学年とのつながりを意識した学習指導案を作成できるようにひな形を作成し、より教科横断的及び縦断的なつながり意識できるようにし、授業の質を高めていく。

学校教育目標の達成に向けて、教職員が主体的、対話的に研究を進めると同時に、子どもたちが主体的、対話的に学んだり、各教科で学んだことをつなげて考えたりできるよう、①～④の取組みを進めていきたい。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
７月	「食育」会議開催（研究内容周知、確認） 「食育」会議開催（アンケート内容検討） 「食育」会議開催（アンケート実施、集計、分析）
８月	カリマネに関する研修会（熊取町全体）
９月	カリマネ（食育）に関する校内研修会開催 カリマネ（食育）に関する校内研修会（田村知子教授招聘）開催
10 月	「食育」会議開催（各学年の取組みについて） カリキュラム・マネジメント検討会議（府主催）
11 月	調理実習（５・６年）、「食育」会議開催（校内研修会の開催について検討）
12 月	「食育」会議開催（アンケート内容検討）
１月	「食育」に関する校内研修会（藤本勇二准教授 招聘）開催
２月	小・中学校「カリキュラム・マネジメント」実践研修（府教育センター主催） カリキュラム・マネジメント検討会議（府主催） 「食育」会議開催（アンケート実施、集計、分析、各学年の取組みについて）

実践校【岬町立深日小学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☑　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

研究テーマ　「ひと・まち・つながる教育」

年間を通して全学年が教科を横断しながら自然豊かな岬町の特性を活かしつつ、課題である「少子高齢社会」に対し、子どもが主体的に試行錯誤しながらより良い解決を導き出す。そのために、

子どもが学校・地域・大学・行政・企業等と多様なかかわりを持ち、学びを広げ、深めることで郷土や地域に誇りや感謝の気持ちを持つことを目的とする。

① 岬町のまちの様子を学び、自然の豊かさや旧跡や名所、公共施設、公共交通について探究し、地域の生活を支える人々やその活動の大切さを知る

② 地域の資源として、地域の方と協力して栗拾い・ヒラメの稚魚放流・潮干狩り・田植え・稲刈り・郷土料理づくり等を実施し、岬町の自然の豊かさを知る。また、子どもをはじめ家庭や地域が豊かな体づくりを推進していくために学校が発信していく。

③ 高齢者や地域の人たちとのつながりを通して、豊かな人権感覚や知恵を身につけ、ともに生きる社会性を養う。

（２） 調査研究の内容

〇全校で教科横断的な視点から「ひと・まち・つながる教育」の実践

これまであった学校行事を精選し、再構成することを４年間かけて実践してきた。生活、総合的な学習の時間を軸としながら他教科との関連を意識してカリキュラムを編成し直した（【資料１】）。本校の特色である「体づくり・健康教育・食育」の実践を深めながら、上記②の地域の資源を多く活用した内容を地域や大学、教育委員会などの行政と連携して実践してきた。

〇全校での実践

Ａ：梅の植樹会、米作り、郷土料理づくり、科学教室等

たてわり活動や異学年の組合せなど複数のパターンを用いて、地域の方の協力を得ながら実施した。自分たちで育てたお米を使って、手まり寿司を作った。この取組みは昨年も実践しており、児童がノウハウを覚え、作業にも慣れてきたこともあって中・高学年が低学年へ教える時間が増えてきた。また、本校の子どもたちの「理科」への課題があるため、自然科学等に興味関心を持ってもらい、生活に生かしていく取組みをしたいということから科学教室を全校で実施した。地域の人にも参加してもらい、子どもたちと実験を楽しんだ。地域の方とのつながり以外に、近隣大学（和歌山大学）とは地域連携の一つとして捉えており、取組みの大きな役割を果たしている。

Ｂ：スポーツテスト、生活習慣調査、体づくり

全校での体力測定では、異学年の教え合いや学び合いを通して、主体的に楽しく運動できるように工夫している。また、生活習慣調査は自分の生活習慣を時間軸で書くことで客観的に自己分析できるようにしている。そこから見られる課題を自ら見つけ、改善に向けて取り組むようにしている。体づくりは全学年が月ごとに交代で地域の高齢者の集いである「ふれあい喫茶」に参加し、学習の成果の発表だけなく、体を一緒に動かしたり、おしゃべりを楽しむ催しへと拡大している。こうした児童との交流を楽しみに参加する高齢者が非常に多くなっている。

〇学年ごとの取組み事例（2019年度）

・１年…栗拾い（生活・図工・国語）―深日地区財産区の方

・２年…まちたんけん（生活・国語）―校区内の7団体・淡輪漁業組合等

・３年…みさきめぐり（社会・総合・外国語活動・国語・理科）―町内の13団体（写真の撮影と展示）

・４年…地域・福祉交流学習（総合・国語・図工）― 地区の方

・５年…米作り・漁業調べ（社会・総合・理科）―　地区の方、深日漁業組合
・６年…地域の方言調べ（国語・総合・道徳）―地区の方、岬町生涯学習課

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

児童のふりかえりより

事例１：「昔の人がやっていたことを実際にできるということがいいと思った。」
「おばあちゃん、おじいちゃんだと丁寧におしえてくれて、それについてのことわざや色々なことを教えてくれる。」「子どもとふれあったりすると笑顔になっているんじゃないかなと感じた」
「地域の方とふれあったり協力したり先生とも協力したりして普段できないことをできていいと思った。」　　↓↓
『自分にこんな力がついた！』
「私は地域の方と話して、自分から話しかけられる力がつきました。」

事例１：６年生Ａ
・６年生は約４年間、地域との連携を模索し深めていく過程を経験した学年。
・19 人全員が地域と連携した行事を肯定的にとらえ、高齢者とかかわることで自分自身や他者の変化や成長に気づけている。

事例２：「今までになかったことができた」
「教科書に書いてあったことが体験できて身近にあるんだなと感じた」
「自然がたくさんあるからできたことだと思った」
↓↓
『自分にこんな力がついた！』
「私はすべて身近にあると感じる力が付きました」

事例２：６年生Ｂ
・教科書の内容が身近に体験できたということは学習内容が体験学習を通して実感でき、身の回りの環境や生活経験にもフィードバックされてきているといえる。

（アンケート結果より）
◎交流はあなたにとって良い経験になりましたか

	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
3 年	7	4	0	0
4 年	15	2	1	0
5 年	6	0	0	0
6 年	19	0	0	0
計	47	6	1	0
	87%	11.1%	1.9%	０%

○校内研修会（12月18日）において、それぞれの取組み（10月から12月）について検証を行った。学校全体や各学年での取組みについて一つのテーマ（単元や取組み）を例に挙げ、ふりかえりを行った。取組みについて「教師・学校の取組」としての成果と課題を記述したり、「子どもの

姿」の「よさ」と「課題」を書き出したりした。書き出すことにより、次回への取組みへの改善につながった（【資料２】より）。また、別紙１で書き出したテーマ（単元や取組み）について、教科ごとに書き表した（【資料３】より）。「実際に教科横断的に実践できた内容」の整理を行ったうえで、次回につなげるために、さらに追加できる教科がないか検討した。実践を行っただけではなく、その取組みが、各教科としてとらえられて、教科横断的につながっていることを確認することができた。また、教科としてとらえたことが、評価につながっていることを理解することができた。

○成果

児童のふりかえり（事例１・２）から「ひと・まち・つながる教育」の展開において、これまでの継続的な取組みの成果がみられていることが明らかになった。地域等の交流経験が児童にとって肯定的にとらえられている。また、つながりを深めたことで、児童だけでなく地域や企業、大学など外部からの協力や支援の充実にもつながっている。教員にとってもこの取組みが各教科で学習を行うことの位置づけや効果を確認することができた。地域を取り入れた教材開発にも積極的に行うことができた。

○課題と改善の方策

①（課題）これまでの教科の構成を再検証し、単元の目標を達成するための教科横断的な複合単元構成を具体的にどのようにするのか。

（方策）【資料１】の作成をもとに、全学年の教科構成と取組み内容をわかりやすく提示するための教科横断的な模式図を作成し、実践していく。

②（課題）各教科の評価規準を設定することが難しかった。

（方策）教科構成を確立したうえで、各教科の評価規準を明確にし、取組みを行っていく。

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
10 月	・栗拾い絵画（低学年）　・運動会（５日） ・郷土料理（手まり寿司）づくり（１～６年）（17 日） ・ホームスタディウィーク（10 日～16 日） ・みさきめぐり（３年）（18 日）　・地層見学（６年）（25 日） ・カリキュラム・マネジメント調査研究検討会議（25 日）
11 月	・修学旅行（６年）（５．６日）　・防災センター見学（４年） ・社会見学（製鉄所）（５年）　・ 社会見学（岬町製菓工場）（３年） ・孝子の森公園めぐり（２年）　・深日漁協見学（５年） ・聞き取り学習（視覚障害）（４年）（11 日） ・昔の遊び体験（１年）（14 日） ・岬高校出前授業（点字体験）（４年）（15 日） ・ふれあい喫茶（１～３年）（20 日）

	・食育出前授業（３年）（22 日） ・授業研修会（模擬授業 11 月 21 日・研究授業 11 月 28 日） ・中学校出前授業（５・６年）（29 日）
12 月	・深日交流発表会（地域への学習成果報告会）（７日） ・方言学習（６年） ・昔の暮らし体験（３年）（10 日） ・陶芸教室（６年）（17 日） ・校内研修会（カリキュラム・マネジメント研修）（12 月 18 日） ・植樹会(梅)（１年～６年）（20 日） 【アンケート・検証・まとめ】 ・近畿小学校学校行事研究大会研修（12 月６日）
１月	・生活習慣調査（１～６年） ・認知症講座（５年）（20 日） ・租税教室（６年）（23 日） ・橘逸勢書道出前教室（６年）（30 日）
２月	・ホームスタディウィーク （19 日～25 日） ・工房みさき（授産施設）見学（５・６年）（12 日） ・ユメマチ出前授業（地域学習）（６年）（14 日） ・カリキュラム・マネジメント調査研究検討会議（２月 18 日） ・ふれあい喫茶（６年）（19 日） ・科学教室（１年～６年生）（２月 21 日） ・校内研修会（カリキュラム・マネジメント研修）（２月 25 日）

３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（〇：成果，●：課題）

〇各実践校において、全教職員でめざす子どもの姿とその取組み内容を共有し、前進させるための方策（例、見える化ボードや研究授業後の研究会の在り方の工夫など）が具体的になり、カリキュラム・マネジメントで大切にすることで示されている全教職員が持ち味を活かしながら力を合わせ、わが校（各実践校）の教育課程を全教職員が語れる学校づくりにつなげることができた。

〇学校教育の効果を検証して改善するといったPDCAサイクルを１年間という大きな期間だけでなく、学期や校内研究等の小さな期間でも行うことで、学校教育の効果を「常に」検証して改善するといったPDCAを構築することができた。また、実践校の中には学校全体という大きな組織でのPDCAにつなげるために、学年や研究組織等の小さな組織でのPDCAも構築することができた。

〇各実践校のカリキュラムをそれぞれの研究テーマに沿った視点で見直すことで、複数の教科等の連携を図りながら授業づくりを行うことができた。

●今年度は、各実践校が、大阪府教育委員会が主催する検討会議や実践研修を通して、カリキュラム・マネジメントについての理解を深め、実践につなげてきた。次年度は、その実践

をもとに取組み内容の深化をめざすとともに手引きの作成を通して、他校への発信を行う必要がある。この実践と発信を効果的に進めるために、検討会議だけでなく、連絡会や実地調査等を行うことを通して、各実践校の取組み内容の深化と発信のバランスを図っていく。

４．参考資料

【必須】

①大阪府の取組み概要（別添）
②カリキュラム・マネジメント検討会議の資料（紙媒体のみ）

【任意】

①摂津市立摂津小学校（別添資料）
②枚方市立招提小学校（別添資料）
③和泉市立北池田小学校（別添資料）
④熊取町立西小学校（別添資料）
⑤岬町立深日小学校（別添資料）